



MINATO TOKYO

# Bulletin

みなと  
ユネスコ

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY/MINATO UNESCO ASSN. 16-3.SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004/KIMITADA MIWA PRES.  
発行所/港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL・FAX 03 (3434) 2233 発行人/三輪公忠

2009年6月2日発行 第116号

## 目次

P1-2	巻頭言	P9-11	国際理解講演会 「中国のメディア事情」
P2	世界の味文化紹介「スウェーデンの家庭料理」	P12-15	国際理解講演会 「アフリカ自転車一人旅で学んだこと」
P3	総会と、アルメニア交流の会	P16	追悼文 事務局便り
P4-8	国際シンポジウム 「世界遺産の環境と観光 日本文化からの発信」		

## 目と目があえば

港ユネスコ協会会長 三輪公忠

殺伐な事件ばかりの毎日、道であう犬に微笑む。ちいちゃいお子さんに微笑む。犬のうちでも、小型犬との「アイ・コンタクト」は捨てがたい。ストローラーの赤ちゃんの生まれたままの命の穢れなさは神々しく、見つめると、こちらの心まで洗われる。

なんと殺伐な世間だろう。テレビをひねれば、朝から晩まで、いやなニュースを流している。朝と晩と、ひどいのは、翌日もそのマンマの同じニュースが読み上げられている。もっと大事な情報がありそうなものだ。もっと掘り下げるといいのに。

犬や、物言わぬ赤ちゃんに微笑むのは、目と目があって、やさしい思いが行き来するからだろう。いやほとんどのはこちらの胸のうちの温かい何かが、犬の好奇心に満ちたまなざしに吸い取られていくような、心地よさなのだろう。赤ちゃんは、眠っていても、その太陽のように輝いている相貌に安らぎをもらうからだろう。

だけどどうして大人は、目と目で、今日は、いいお天気ですね、お花見ですか、など語り合わないのだろうか。見ても見ていないという、日本文化伝来のエチケットと言えるのだろうか。見えているのに目と目の優しさのコンタクトをあえてしないということに、かえって、悪意を感じさえる。

そんな傾向を助長したのは、むろん携帯電話の普及がある。地下鉄の座席は、書斎になったり、団欒の場になったりしているのだろう。他人の介入はごめんこうむりたいのだ。傍若無人というが、化粧室であったりする。

よく観察すると、女性は睫毛、男性は口髭に手間をかけているのがわかる。眉にそりを入れている若者も多い。個性というのだろう。それだけ自己主張がはっきりしてきた分だけ、他人とのかかわりから遠ざかったのだろうか。

地震雷火事親父のうち、親父は、重石にならない。親父は「チョイワル」のファッションである。

「地球にやさしく」も社会現象としては定着したようだが、温暖化現象は深刻化している。いよいよ末世か。しかし地球がどれほど荒廃しようとも、人間が死に絶えれば、地球の回復は200年で、日本は万葉時代の照葉樹林の景観になるという。自然界の動植物にも人権のような、権利があるとすれば、人間とはなんと罪深い存在か。

人間同士の争いなど、自然に対する罪深さと比べれば、ほっときなさいよと言いたいぐらいかもしれない。

4月25日の総会に、アルメニア人の母と娘が、民族衣装で踊ってくださる。はっと、気付いたことがある。その前日の24日は、アルメニアの人々にとって、大切な記念日なのだ。第一次大戦中の1915年4月24日にはドイツの同盟国として交戦中のトルコはアルメニア人を東南の砂漠地帯に追放し150万人ものアルメニア人が、撃ち殺されたのでなければ、餓死した。4月24日はアルメニアの人々にとって、忘れることの出来ない記念日なのだ。

平和の日本にも、忘れられない記念日はある。広島長崎は、自分から始めた戦争の一つの結果であった。

(2頁に続く)

(巻頭言 1頁からの続き)

だから、ユダヤ人のホラコーストとしばしば並び称せられるアルメニア人の体験とは根本的に違う。「因果応報」とあきらめる日本人も多いだろう。

アルメニアの人々の悲しみの記念日に、文明の衝突

が火を噴いている今日、歴史の教訓を読み込もうではないか。文明間の理解の促進、異文化への寛容、尊敬、相互信頼で、共存共栄の道を開こう。その第一歩は、目と目のコミュニケーションから始めよう。

(2009・4・9)

主催：港ユネスコ協会

後援：港区教育委員会

### 世界の味文化紹介

# アンコール！「スウェーデンの家庭料理」

日時 2009年2月21日(土) 12:00～15:30

場所 港区立男女平等参画センター料理室



講師 **マリアンヌ・ウィルソン黒田さん**

外国人相談員、m&y プロダクション主宰

メニュー・  
・タラのグラタン マッシュポテト添え  
・パンケーキ  
・スタッフドエッグ  
・ポテトスープ

「アンコール！スウェーデン家庭料理」は、前回2008年11月に実施した「スウェーデンのクリスマス料理」には申込みが定員オーバーして、参加できなかった方が多かったので、再度マリアン・ウィルソン黒田さんに講師をお願いして実現しました。

今回は、北の海で獲れる旬の鱈をメインに、ポテトたっぷりのボリューム感あるレシピを企画していただきました。

スウェーデンでは贅沢品であるケチャップを使った色鮮やかな鱈のグラタンは「本当においしかった」という参加者の声が多数アンケートに寄せられました。

これらの料理を通してスウェーデンへの理解が深まるとともに、さらに興味が湧いたように感じました。

もちろん料理だけでなく、参加者を魅了したのはスウェーデン人魂を感じさせるマリアンヌさんのお話です。マリアンヌさんのお婆様はお体のご不自由だそうです。お家には「いつかまた自分の手でお料理ができる日が来ること」を願って、電源を抜いた冷蔵庫や束ねた食器が置いてあるそうです。日本ではとても考えられないことです。

「日本ではお誕生日のケーキを等分に切り分けるけど、スウェーデンではありえないことよ。主役がまず自分の分を欲しいだけ自分でカットし、残りのケーキを皆でそれぞれ自分が必要なだけいただくのがスウェーデン方式」だというお話にも、参加者はびっくりしました。

スウェーデン人の98%がスウェーデン人として生まれたことに満足しているという調査結果が出ているというお話を伺いました。スウェーデンのクオリティ・オブ・ライフを感じ、私も生き方を変えるウォーミングアップをしなきゃと思い始めました。

今回アンコールとしてお忙しい中、再度、講師を引き受けてくださったマリアンヌさんに心から感謝しています。料理委員会ではこれからも皆様楽しいお話を聞きながら、美味しく学べる空間をお届けいたします。どうぞ今後の「世界の味文化紹介」もお見逃しなく、ご参加をお待ちしています。

(世界の料理委員会 前委員長 小松晴世)

# 港ユネスコ協会総会 と 日本・アルメニア交流の会

日時：2009年4月25日(土) 13:00～15:30

場所：港区立生涯学習センター101号室

4月25日(土)午後1時より1時間にわたって、2009年度港ユネスコ協会の総会が開催されました。例年5月に開催されてきましたが、今年度以降は4月中に開催したいと思っております。

約50名の方が出席されました。日頃お世話になっている港区教育委員会からは森玲子生涯学習係長及び藤咲絢介さんご出席くださり、また、生涯学習センターの逢坂所長もご出席くださいました。

総会は、中川副会長が進行役、三輪会長が議長となって議事が進行されました。

冒頭で、去る3月3日に亡くなられた大場浩平元副会長のご冥福を祈り、全員で黙祷を捧げました。

三輪会長は挨拶の中で当協会の歴史と活動について話され、また、2011年には協会が30周年を迎えることに触れられました。さらに、総会後に行われる「交流の会」のアルメニアにとって、昨日4月24日は、第一次大戦時の悲慘な歴史から「特別な日」であることをご紹介くださいました。最後に、我々の活動の基本はボランティアであり、

これからも友愛の精神で地球社会に貢献していきたいと締めくくられました。

議事の方は、2008年度事業報告と収支決算報告が役員から行われ、監事から「監査の結果間違いなかった」という報告がありました。続いて2009年度の事業計画案と予算案が提案されましたが、全て承認され、滞りなく総会議事は終了しました。

なお、これらの内容につきましては、別途各会員に郵送されている総会資料をご参照ください。



午後2時過ぎから、同じ会場で、「日本・アルメニア交流の会」と懇親会が催されました。

ご出席くださった武井雅昭港区長から協会と国際交流に関するご挨拶をいただきました。また、与謝野馨理事の代理の土屋様からもご挨拶をいただきました。

交流の会では、日本在住のアルメニア人であるスザンナさんが、ご自身の手作りの民族衣装を着て、娘のエリナちゃんと一緒にアルメニアの歌と踊りを披露してくださいました。歴史や人々の暮らしについても話をしてくださったところ、出席者から次から次へと質問が出て、スザンナさんはとても嬉しそうに答えてくださいました。和やかな雰囲気の中に幕を閉じました。

懇親会のためにいろいろと軽食を準備して下さった小松さん、奥村さん、磯部さんはじめ皆様、どうも有難うございました。  
(事務局長 水野隆)



第27回港ユネスコ協会国際シンポジウム2009（後援：港区教育委員会）

# 世界遺産の環境と観光 日本文化からの発信

日時 2009年1月20日（火）午後6時半～9時  
会場 男女平等参画センター（リーブラ）5階ホール

挨拶：武井雅昭 東京都港区長

パネリスト(敬称略、五十音順)：

井上正嗣（京都府宮津市長）

中見真理（清泉女子大学教授）

樋渡紀和子（オンブズマンみなと代表）

前野まさる（日本イコモス国内委員会委員長）

モデレーター：三輪公忠 港ユネスコ協会会長

司会：松本洋 港ユネスコ協会副会長

挨拶：武井雅昭 東京都港区長



港区には多くの観光地があり、近代と歴史が融和する魅力にあふれた場所である。交通の便にも恵まれている。

22万人の住民のうち約1割が外国籍（123カ国から来ている）という国際性に富んだ街でもあり、国際都市として世界に向けて日本文化からの発信を続けていきたい。

港区は環境行政とともに観光行政に力を入れている。その一つとして、区内に残る伝統技術、多くの大使館や観光スポット、商店街など様々な要素を結びつけた「ものづくり観光商業フェア」を行っている。これからも港区の魅力を作り上げ、それを広く知ってもらうために努力していく。

モデレーター：三輪公忠 港ユネスコ協会会長



チラシに、ポール・クローデルというフランスの外国官、詩人として知られる人物の言葉を紹介している。「世界で生き残る価値のある民族があるとすれば、それは日本人である。日本人は貧しいが高貴だ。」現代の日本人は豊かだが、精神的にはどうか？出版業界を見ると、一番売れているのがドストエフスキーや哲学書。人間とは何か、何のために生きるのかを考える時代が再びやって来た。

カンボジアのアンコールワットは、立派なホテルが建って日本からも多くの観光客が訪ねる人気の世界遺産である。ここでホテル客がシャワー、プール、水洗トイレで一日に使う水の量は地元の人が一か月に使う量と同じだという。お金を儲ける人がいる一方で、生活を脅かされる住民もいる。そういう問題意識でこのシンポジウムを企画した。江戸の文化は「隠居文化」であり、生活の中で文化遺産を守ってきたことが参考にならないか？

中見真理 清泉女子大学教授



柳宗悦は民芸運動創始者として知られる。民芸（民衆的工芸の略）とは、民衆が作った日用品の中にも優れた美があるという考え。民芸は日本文化として海外への発信に成功している。この考えがなぜ海外で受け入れられ続けるのか？なぜ日常のごくありふれた生活の品々がアピールするのか？民芸の背後にある思想に、日本文化発信の際に心にとめるべきヒントを見出せるのではないかと柳宗悦は戦前において、諸民族文化の個性を高く評価し、多文化共生の観点を既に持っていた。

特に知られていたのが朝鮮に関する活動。1910年から日本は朝鮮を植民地にし、日本人の大多数は朝鮮を低く見ていたが、柳は朝鮮人・朝鮮文化を高く評価した。1919年の独立運動を契機に、日本の植民地政策、特に文化的同化政策を批判した。文化財保護のため政治権力をも批判

した。例えば景福宮の正門である光化門擁護の件がよく知られている。柳は1924年、朝鮮民族美術館を開設、朝鮮には素晴らしい日常の美があると、朝鮮の人々を励ました。

柳は、朝鮮は「偉大な美」を持つ国であると述べ、1995年に世界文化遺産に登録された慶州の石窟庵を非常に褒め称えた。また民族、自然環境、工芸品などすべてを有機的に関連付けた一つの「生命」とみていた。総督府による石窟庵の修復を批判し、「自然と芸術を非常にバランスよく結びつけてきた聡明な朝鮮人みずからに修復してもらうべきではないか」と主張した。総督府の工事では石窟庵をコンクリートで覆ったので後に湿気の問題が発生し、コケが生えた。現在でもガラス張りとしエアコンで温湿度を調整しているため、遠くからしか見ることが出来ない。

柳の活動は「世界が一色にならない平和」「複合の美」の平和思想に支えられた。日本的なもの、朝鮮的なもの、中国的なもの、このいずれも失うことは世界にとっての損失であると。そして、多文化共生の観点を非暴力と結びつけていた。また沖縄、台湾先住民、アイヌ文化なども高く評価した。強者が弱者に自分たちの価値観を押し付けることを戒め、同時に弱者も強者の模倣に終わってはならない、自分たちの文化に誇りを持つべきである、と述べた。「梅の花は桜の花をそしることなく梅であるのが良く、それによって自然を美しくすべきである」とも語っていた。

柳は、自然を征服の対象にする自然観には批判的だった。自然をこえる美はないとみており、人間は自然に対してもっと謙虚になるべきであると説いていた。

パリの「日本民芸の精神」展では、民芸と共に柳宗理の作品も紹介している。民芸と柳宗理の作品には共通点もみられる。

日本文化の発信についてまとめると：

- エリート文化以外にも目を向けると、うずもれた文化資源の発掘が可能になる。
- 「征服」志向の姿勢は、自然環境破壊をもたらすと共に、「弱者」の文化を尊重しない態度を生む。
- 日本文化の発信は、他の文化尊重を伴い、平和・国際交流を促すものでありたい。
- 相手を受け入れてこそ日本文化の発信もうまく行くのではないか。

## 樋渡紀和子 オンブズマンみなと代表



国は平成15年7月に「観光立国行動計画」を決定し、東京都は平成13年11月に「東京都観光産業振興プラン」を策定した。(1)千客萬来の世界都市・東京を目指す、(2)277万人を5年で倍増600万人にする(実績：19年度533万人)、第2期の「東京都観光産業振興プラン」(平成19年度～23年度)では新たな要因が加わった：オリンピック招致、羽田空港の国際化、少子高齢社会。いかに環境を守りつつ観光を促進するか、的確な対応が不可欠。

港区の観光資源は他に例を見ない。東京タワー、六本木ヒルズなど。また、お寺は244あり、そこには自然と建築物が一体になるという日本文化が脈々と流れている。区内に外国大使館は74あり、これらを通じて港区の観光を国外にPRできる。

る。

港区は3つのイメージの観光ゾーンを設定している。

- (1)観光資源確立ゾーン：東京タワー、増上寺、芝公園
- (2)観光資源活用ゾーン：新橋(サラリーマンの街)
- (3)観光資源創出ゾーン：芝浦、港南(橋や港があり、これらをいかに発展させるか?)

観光資源には自然資産(森林、海岸、川)と人文資産(史跡、神社、仏閣)があり、港区の観光は産業振興課、景観は都市計画課、環境は環境課が担当する。自分は環境に力を入れて活動してきた。武井区長になってから総合支所制度を作り、区民の声を聞きながら政策を立てるようになった。(港区の主要観光資源をスクリーン上で紹介。)

## 井上正嗣 京都府宮津市長

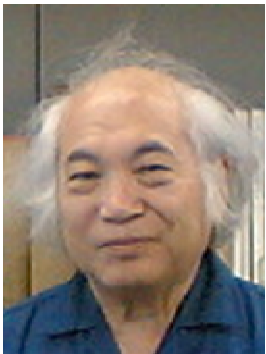


天橋立は日本三景の一つで、白砂青松。日本の庭園景観の重要な原型、日本の文化景観の原点となった日本の聖地である。日本の暫定リストには掲載されなかったが高い評価を頂いた。しかし課題は多々ある。温暖化によって海水面が上昇すると、天橋立は水面下になってしまう。何とか守っていかねばと全市を挙げて頑張っている。

まず海岸保全のための港湾事業、これはサンドバイパス工法で行っている。昔は放っておいても出来た橋立が出来なくなった。そこで港湾事業により美しい白砂青松を守ろうとしている。また薬剤の空中散布など、松枯れ対策も実施している。市民による清掃活動も行っている。自然災害からも守らねばならない。4年ほど前の台風で200本の松が倒された。天橋立名松リバー活動により、倒れた松に新しい命を吹き込んだ。松を環境汚染からも守らねばならない。

地球温暖化による海面上昇を防ぐために、環境先進市として積極的に温暖化防止に取り組んでいる。昨年6月にはハンドインハンド活動といって、2200人の市民が手をつないで砂浜に立ち、地域の思いを日本全国、世界に発信した。各方面からの支援を頂きたい。

## 前野まさる 日本イコモス国内委員会委員長



1960年エジプトはナイル川上流にアスワンハイダムを建設したが、この時、工により紀元前13世紀にできたアブシンペル神殿が埋没することが分かり、ユネスコが世界に呼びかけて保存運動を行い、神殿を移築した。これがきっかけで1964年に「記念物と遺産の保存に関する国際憲章」(ヴェニス憲章)が出来、その時にNGOのICOMOSも誕生した。ICOMOSは民間組織であり、世界遺産の審査、監視、保存などに取り組むことを役としている。日本ICOMOSは1979年に正式に発足した。

世界遺産条約がユネスコ総会で採択されたのは1972年で、日本が世界遺産条約を批准したのは他の国より20年遅い。何故か?世界遺産は「自国で守ることが困難な遺産について国際的協力体制によって保存する」ことが前提だが、日本は憲法9条で戦争を放棄し武力による国際的紛争は起こさないし、「自国で文化遺産の保存は十分出来る」

と、世界遺産条約の前提を考えていたからである。しかし、諸国の動きは世界遺産を文化遺産の格付け化する傾向があらわれ、1992年に日本も世界遺産条約を批准し世界遺産登録をする様になった。最近では観光立国の種として使いたいなどと、本来の精神とは異なる別のところで世界遺産登録する傾向が見られる。2008年現在の世界遺産は、総数878件、うち文化遺産が679、自然遺産174、複合遺産25件である。

世界遺産審査の手順は、先ず加盟国が世界遺産登録の申請をすると、ユネスコからICOMOSに審査の依頼が来る。ICOMOSは申請資料を審査し、文化遺産の専門家を現地に派遣調査する。先だって上野の西洋美術館がコルビジェの遺産として世界遺産に申請したということでオーストラリアから調査員が来た。それらの成果はICOMOSからユネスコに報告し、ユネスコから関係国に通知が行く。

日本には2008年現在、世界遺産が14ある。しかし、世界遺産で定めている遺産の周辺環境(バッファゾーン)と行政の都市計画とかみ合っていないことが結構ある。実際に起きたことだが、銀閣寺のバッファゾーンとなる半鐘山の丘の裾を開発のために切り取ってしまったことがあった。開発を合法とする市と地元の人たちが激しく対立した。開発は中止したが、文化遺産の保存のためには、文化遺産の環境と都市計画と観光、これらが皆、連携しなければならない。

広島県福山市の歴史的港湾跡の浦は住民による保存運動があり、ICOMOSでも埋め立て中止を求める決議と要請を2004年から4回も行った。多くの文化遺産は、保護されずとも住民が代々誇りを持って残し伝えてきた歴史がある。その仕組みを評価することが大切である。熊野古道では、林業者が植林をしながら、何百年も守ってきた歴史がある。これを評価せずいきなり世界遺産登録をしたので、ある林業者は怒り、熊野古道の林道に怒りの落書きをしてしまった。

町並みを調査する時に「調査」という言葉を使ってはいけない。「この町の良いところを探しています」と持ちかけること、誇りをもって案内してくれる。保存の観点から地元の人たちが誇りを持つことが重要なのである。建築遺産の保存では(1)使えること、(2)清潔であること、(3)価値が見えていること、が重要である。この三原則がきちんとしていけば物は残る。

日本人は古来外来文化の受信者であり、発信はしていない。鎖国をした時代に日本の文化は育っている。幕末、明治の始めに来た外国人が、錦絵を見て感動し、屋敷の緑、路地の植木棚を観て感動し、日本は「素晴らしい」と伝えてくれたのである。今後、我々は日本文化を育て、発信者として、国際文化交流をもっときちんとしなければならない。

司会：5分ずつどうぞ。

井上：国際的評価に耐えるにはどうするか、が今後の課題。日本の聖地として世界に向けて発信していきたい。観光客が増えることにより保全が難しくなる問題については、天橋立は現在でも全国から年間260万人の観光客を迎えている観光地であり、上方からの景色を楽しんでもらっている。子供たちのためにこの素晴らしい橋立を将来にわたり残したいと願って取り組んでいる。

樋渡：港区を環境先進区、高福祉区にしようと区長に提案した。区長も環境問題については心を砕いており、区民の森など他の区には例を見ない取り組みをしている。今考えているのは、高層ビルと低層住宅街との共存である。これを港区の特徴としていきたい。港区全体を公園とする構想も持っている。区民による提案も緑を取り上げたものが多く、意識が環境に向いている証拠だと思う。

中見：樋渡先生からは、港区にこれだけ素晴らしいものがあることを知り、感動した。そこに住む人たちが誇りを持つことの大切さも考えさせられた。井上市長のお話からは、文化遺産の保護が環境を守る動きにつながっており、同時に人々を結びつける結果にもなっていることに感銘を受けた。天橋立の一人一坪大作戦のような動きが文化財保護の柱として広がっていけばどんなに素晴らしいかと思った。前野先生からは、日本が世界遺産の条約批准において遅かったのは戦争との関わりであったことを教えられた。日本は恵まれていると改めて思い、恵まれた日本人がそうではない国の文化遺産保護に援助出来ることがたくさんあるだろうと思った。

前野：観光は物見遊山ではない。観光の「観」は「心で見ると」の意味であり、「光」は「その物の徳」をいう。本当の観光はどうすればよいか？日本に観光に来る人たちが学べるものを創ることだ。それが出来れば発信者になれる。観光地にしようと立派な道路を作るのもマイナス。むしろちゃんとした地元のガイドを育てることだ。

日本では土地本位制のため上物に市場価値がない。これも何とか直さねばならない。そこに住む人から学ぶことも重要だ。例えば谷中は事件の発生率が非常に低い。路地に植木棚があるので、花を見て言葉を交わす。必ず挨拶をする、掃除は隣の前まで、留守番をしてあげる、おしゃべりは小声でしない。こういう路地社会の生き方を学び再生する必要がある。

#### 質疑応答

Q： 樋渡先生にお聞きしたい。石原都知事が熱心に東京オリンピック招致の旗を振っているが、地元の老人クラブでも反対意見ばかりである。他にやることがあるだろうと言いたい。

A (樋渡)：私個人はオリンピック招致に反対だ。ただし、いろんな会派がからんでいる。オリンピック開催にはどんな効果があるのか、環境破壊につながらないのか？会場の方のご意見はどうでしょう？やはり反対の方が多いようですね。ただ、立候補しても東京に来るかどうかわからないので、今のところ楽観視している。

モデレーター：前野さんが路地に植木棚があるという話をなさったが、私は非常によく似たことを考えていた。明治神宮の森は全国津々浦々から、自分の村や町を代表した青年が持ち寄った木々の植樹から生まれた。地上げにあって、路地で育てていた実生の木々はただ捨てられた。もったいないことをした。お台場の埋立地は、老人が、孫と一緒にその木々を植えることが出来たはずだ。港区の「まちづくり懇談会」で提言したのは30年も前のこと。漢字の「老」は尊敬の意味をもつ。その頃実行していれば、今頃は孫もびっくりする、立派なジジババの森が出来ていたはず。都の住宅公社の高輪住宅の植栽の投げやり状態、泉岳寺の山門周辺の汚さにあきれる。また東京都教育委員会の立てた江戸のキリシタン殉教者についての説明銅版の字が間違っている。行政が変わるには時間がかかる。だが、我々が変わることは出来る。皆さん頑張ろう。

Q: それぞれの山や木に神が宿るという日本人の自然観と、自然遺産・人工遺産の保全が一体となって結びついていることが大事だと思う。チラシに「行動を呼び起こすことにつながるかもしれない」とあるが、何故「つながる」ではなく「つながるかもしれない」と腰が引けているのか、伺いたい。

Q(司会): それに関連して井上市長にお聞きしたいが、天橋立は自然遺産ではなく文化遺産だという。確かに雪舟は水墨画に描いたかもしれないが、自然と文化の区別を世界遺産という中でどのように考えておられるのか?

A(井上): 自然遺産は環境省が担当している。天橋立は人間の手で保全してきたので、文化遺産として認めてもらいたいと考え、文化庁も賛同してくれた。富士山が同じように、文化遺産として昨年暫定リストに入った。日本文化という京都と思われがちだが、日本のルーツとして丹後の地は2000年、3000年の歴史がある。世界の中の環境モデル都市として世界遺産を通じアピールしていきたい。

モデレーター: 井上市長にお聞きしたい。天橋立の松はアカマツ?クロマツですか。種が朝鮮から流れて来たのか?日本の国土に元来松はなく、外来である。これがきちんと説明できれば世界遺産ですね。樋渡さん、記念碑の誤字については都に申し入れて訂正させてほしい。前野先生が「日本人による発信は出来ない」と言われたことについて、私は、謙虚が美德の日本人は発信しなくて良いと考えている。外国人が日本に来て良いと思うものを見つけて持って帰ればよい。中見先生の話聞いて思ったのは、日本と朝鮮と中国、この3地点で同じ民芸の思想を共有し、相互の交流で何かが起こったのであれば、ヨーロッパで3カ国に置かれたローマ時代の要塞が世界遺産として登録されているのと同様、遺産と認められる可能性がある。

樋渡: ご指摘の場所の写真があるので見てほしい。元和キリシタン遺跡。家光の頃のキリシタン迫害により、ここで50人の信徒が火あぶりの刑に処せられた。観光スポットとして有効な地だ。ご指摘のあった高輪の史跡問題についても、住民から声を上げるのが一番なので、地元の方々と話をしてみたい。宮津市民のような取り組みは、港区ではこれから始めることになる。

前野: どこの世界遺産も、そろばん勘定ばかりだ。その前に、自分たちの文化を守ること、地元住民の誇りを守ることが重要。私もそのことに気づき、調査という言葉は一切使わなくなった。「あなたの町の良いところを探しています」と頼むと、どこの住民も快く応じてくれる。岐阜の提灯がいま世界中で見られるが、伝統産業の良いデザインは現在に生きるものであれば世界に広まる。港区に置屋の建物も残っているが、港区の文脈の一つであり価値を活かし、現代に生きる活用を建てる必要がある。

樋渡: 芝浦地区に、協働会館という昭和11年に建てられた近代和風建築の旧芝浦見番の建物があり、現在は閉鎖されたままになっている。平成18年9月に区民からの請願を受け、港区議会は東京都に対し、当該建物の現地保存と利活用に関する意見書を提出。都の対応を待っている状態である

中見: 現在、若い人・中年の人は仕事が忙しく、生活パターンを変えていかないと文化遺産を守ることは難しいのではないかと。比較的時間もエネルギーもお持ちの「老人」(モデレーターが言われた尊敬する先達の意)の方々に期待したい。一方、若い人たちの生活も、文化遺産を守るためにも変わらねばならないと感じた。

Q: ヤナギソウエツだと思っていたが、先生はムネヨシと呼んでおられる。

中見: 正式にはヤナギムネヨシであり、ご長男はムネミチ。しかし家族の間や海外ではソウエツ、ソウリと呼ぶことのほうが多い。

(学術文化委員会 担当常任理事 宮下ゆかり)



# 「中国のメディア事情」

日時：2009 年 2 月 20 日（金）  
午後 6 時 30 分～8 時 30 分  
会場：港区立生涯学習センター・305 号室

講師：渡辺陽介氏

共同通信社・外信部記者、  
前中国総局長（04 年 12 月 - 08 年 10 月）

講師は 1983 年上智大学卒業と同時に共同通信社に入社され、今日まで主として中国とアメリカをカバーしておられます。北京オリンピックを挟んだ 4 年間に北京に駐在された後、3 か月前に帰国されたばかりです。その直前には 4 年間ワシントンで取材活動をされました。

今回、中国メディアの最新情報についてたいへん興味深いお話を伺うことができました。ご講演の一部を抜粋、要約して掲載させていただきます。

## はじめに

私は 2004 年 12 月から昨年 10 月まで 4 年弱の間、北京におり、メディアの人間として現在の中国のメディアをつぶさに見る機会を得た。大きく変化する中国のメディアと日本のメディアを比べながら、メディアの本来の機能や、社会の中での役割についても考えさせられる機会ともなった。

中国のメディアは今後どういう方向に行こうとしているのか、現時点でどのような規制があり、どういう問題点があるのか、未来へ向けた改革をどう進めているのかなどについてお話し、中国語で「全球化」というグローバリゼーションの中で中国メディアのあり方も変らざるを得ない側面についてもご紹介したい。

## 私の中国との関わり

1991 年から 1 年間北京に語学研修のために滞在し、94 年から 2 年間上海に、その後 1 年あまり香港、そして今回の 4 年間の北京駐在があるので、英国統治下の香港も入れると、合計で 8 年余り中国地域に暮らした。その間、97 年の香港返還や、日中関係の悪化を受けた 2005 年 4 月の反日デモ、昨年 3 月のチベット暴動、5 月の四川大地震、8 月の北京オリンピックなど大きな事件、行事に取材記者として関わった。90 年代から現在に至る中国の変貌ぶりについては皆さんもよくご存知だと思うが、専門家は「これだけ短期間に表面的に変化した国はない」と言っている。私は今回約 10 数年ぶりに北京に住んだが、もはや 90 年代初めの街並みは完全に姿を変え、以前住んでいた地区の風景は全く変わっていた。

## 激動期の日本のメディア産業

まず、日本のメディア事情に簡単に触れたい。日本のメディア産業も激動期にあるといえる。新聞界はインターネットと少子化の影響と広告費の落ち込みで地方紙などがつぎつぎと夕刊を廃止し、部数全体も落ち込んでいる。若い人で新聞を読ま



ない人も増える一方である。テレビ業界も広告費の落ち込みが深刻で、視聴率の低下もしばしば指摘されている。新聞もテレビも、日本の旧来型のメディアは今、端的に言うと「元気がない」。

一方、新たなメディアであるインターネットも将来像はまだ明確ではない。ネットがいわゆるメディアの重要な機能である社会の公器としての役割を果たして行けるのか、疑問視する声は消えていない。日本において今、メディアの役割が大きく問われ、メディア自身も未来に向けて自画像を模索している最中である。

## 現在の中国のメディア産業

ひと言で「百花繚乱」とか「エネルギーにあふれ、元気いっぱい」と言えよう。例えば、雑誌一つとっても、北京の街中の新聞スタンドは非常に種々雑多の外国雑誌で飾られて、色とりどりである。アメリカの『ナショナルジオグラフィック』、フランスの女性誌の『VOGUE』。アメリカの雑誌の『コスモポリタン』のそれぞれ中国語版が並び、その横には日本の女性誌の『Ray』とか『ViVi』などが並んでいる。単行本でも、村上春樹は300万部を超える大ベストセラー作家であり、山岡荘八の徳川家康は200万部売れた。渡辺淳一も大人気である。テレビも、さまざまな質の高い家庭ドラマが作られているし、ニュースショーもいろんな社会問題を取り上げている。インターネットや携帯電話については、都市部では若者を中心に日本以上に活用されている面がある。

つまり今、中国社会全体が、社会と経済の急速な発展に伴う躍動感や「上り坂の活気」に包まれている状況にあり、メディアもその一部だといえる。1990年代から中国社会はそれまでの全体主義的な雰囲気をかたがへ捨て、社会的に大きな自由化が進んでいる。メディアもまた例外ではなく、大きな自由化と多様化が進んでいることをまず指摘しておきたい。

## 中国のメディア規制

それでは中国のメディアが日本や世界のメディアの目から見ると自由かということ、そうではない。制度的にもさまざまな規制を受けていることは皆さんも報道を通じてご存知だと思う。

昨年10月、パリに本部を置く国際ジャーナリスト組織の「国境なき記者団」が、世界各国の報道の自由度について順位付けを発表した。トップは北欧の国々で、中国は下から6番目の162位、日本は42位（\*注）。つまり、中国の自由度は主要国の中で最低だという評価が出ている。

現在の中国において当局側が定義する「メディアの役割とは何か」といえば、2006年9月に発表した「国家文化発展計画綱要」という文書に、それは「共産党の主張を全面的に宣伝し、かつ前向きな宣伝を主とすること」であり、「正確な世論の指導を堅持し『党と人民の喉であり舌である』性質を確保すること」だと述べられている。国家の基本方針を記した綱要でこのように述べているのだから、中国のメディアの役割は、一つは世論の指導、もう一つは共産党の宣伝、という建国以来の方針が堅持されているといえる。

だから、欧米や日本などのメディアで重視される

真実の暴露とか、政府機関への監視と批判とか、あるいは、国際紛争における公正な観点の提供などは少なくとも最優先の事項とは位置づけられていない。

政府の基本方針を受けて、中国の記者は取材や執筆に関してさまざまな制限を受けている。まず、共産党と政府当局に対する批判はご法度である。特に共産党の一党支配に疑問符を付けるような言動は厳しく規制されている。また、自然災害の死者数なども社会の安定に影響するという理由で長く公開されなかったし、中央政府が理想としている愛国主義、英雄に対する批判や、歴史認識を変えるような記述などは何世紀も遡るものでも規制がかけられている。

しかし、規制について必ずしも明文の規定がない。中国のメディア側は長年の経験の中で規制を承知しつつ、これと衝突しないようにやっているわけで、規制のラインがどこにあるのかは、ベテラン記者でも読みきれない状況である。これを中国の記者あるいは研究者は「すれすれのボールを投げる」という言い方をしている。こうした規制を実施するのは共産党宣伝部である。

現在、中国の新聞の中で、スポーツ新聞は非常に客観的な立派な報道を行っていると思う。

（\*注 2009年4月時点の順位。ちなみに、ドイツ11位、フランス19位、アメリカ22位、英国28位、イタリア39位である。）

## メディア規制による問題点

私は3つの問題点をあげたいと思う。

1) 「炭鉱のカナリア」の役割の欠如。

炭鉱のカナリアは最初に空気が、酸素がなくなる時に鳴いて騒ぐ。これがメディアの役割といえるが、メディア規制がかけられると、事件やその分野によっては警報が鳴らずに事件がさらに深刻化してしまう。（メラミン入りの製品の例）

2) 一般の人が持つ社会に対する認識に大きな空白やゆがみが出る。

ニュースを知ることには単に出来事を知ることだけでなく、いろんな情報を得ることで自ら選択して知識を蓄え、個人の成長にもつながっていく。しかし、基本的な事実も知らされなければ、認識にゆがみが出る。例えば、カンボジア（当時、中国とは協調関係だった）の虐殺、天安門事件、炭鉱事故なども一般に知らされていない。

3) 不満の捌け口がなくなり、逆に社会の安定化を損ねる。

日本では、非常に不当な扱いを企業や政府から受たり、大きな不正に直面した時には、まず警察に、

あるいは裁判所に行く。そこで埒があかなければメディアに駆け込むことがある。このように、メディアは社会の安定を促す重要な装置の一つとなっているが、それが規制によってできないと不満の捌け口がなくなる。(例：四川地震の被害者の声など)

### 中国指導部の問題への対策

温家宝首相は、昨年のアメリカのCNNテレビのインタビューで、政治改革の必要性を強調した折に、「民主的な選挙制度を徐々に前進させることと、同時に政府への監視機能の強化と政府の透明性を向上させること」を強調し、そのためには特に報道が大事だと言った。

中国のように国土が広くて人口も多く、役人も非常に多い国では、政府を監視する役割はメディア以外には実質的にないこと、公正なメディアの目が大切であること、そして、メディア規制のもたらす問題などについて指導部はよく理解しているようである。しかし、今のメディア規制は、単なる政策への批判だけでなく、歴史認識、人々の個人の歴史の見方や、内政・外政・歴史・統計資料にまで及んでいるので、ある程度自由な報道を認めようと思ってもどこからどこまで規制をはずしていけばいいのか、線引きが並大抵ではない。つまり、客観的なメディアの登場の必要性が認識されてきてはいても、実現させるのはなかなか難しい。一步一步ゆっくり進んでいく方針以外に道はないと考えているのではないだろうか。私は指導部の手腕を見守りたいと思っている。

### グローバリゼーション「全球化」の影響

グローバリゼーションが深まる中で、外部要因によって報道の自由が進む可能性、現実があることも指摘したい。外部からの影響や圧力による変化である。中国の全般にわたる改革・開放政策の一つだと思うが、例えば北京五輪で昨年の1月から10月17日まで、海外メディアに対する規制緩和が実施された。昨年10月17日までの時限立法であったが、期限が来ても延長された。この規定は簡単にいうと、外国人記者は、原則的にチベット自治区以外は自由自在に行ってもいいというものであり、この規定に

よってわれわれは非常に助かった。

中国ではイギリスのBBCやCNNのウェブサイトは日常的にネットに閲覧規制がかけられて見られなかったのが、五輪の数週間前に突然見られるようになった。数少ない例外を除いてほとんどのホームページが見られるようになり、これは非常に大きな動きであった。五輪終了後に、BBCのウェブサイトなどは再び閲覧できなくなったが、外からの圧力が一時的にしろ、中国のメディア自由化を進めた例と言える。

また、グローバリゼーションに対応する中で、ニュースの管理をしている役所が多岐にまたがるようになり、役所同士の綱引きが激化する動きのなかで逆にメディア側の自由化が進むということが起きている。こうした内部の要因によっても、メディアの自由化が進む可能性があるといえる。

### メディアの今後

日本や欧米などメディアの先進国といわれる国において、今、従来の報道、メディアの在り方が、産業として成り立たなくなっている実態がある。政府を監視する機能を果たしていても、それでは産業として成り立たない。フランスなどでは政府が新聞産業の保護に乗り出している。

そうした中で、中国はどのような理想的なメディアの在り方を探っていくのか、これは中国の指導部の大きな挑戦であろう。

私は関心を持って見守っていききたいと思う。

(以上)



後半の質疑応答の時間には、次ぎ次ぎと出席者から多岐にわたった質問が出されました。隣国・中国への関心の高さが窺えました。報道の自由、知る権利などについてあらためて考える機会ともなりました。

(国際理解講座委員会 担当副会長 高井光子)

# 「アフリカ自転車一人旅」で学んだこと

日時 2009年3月18日(水) 午後6時30分～8時40分

会場 港区立生涯学習センター305号室

講師 山崎美緒さん サイクリスト,

「マンゴーと丸坊主 アフリカ自転車5,000km!」(幻冬舎)の著者

山崎さんは大学在籍中、女性で初めて自転車でアフリカ8カ国(ケニアから南アフリカまで5,000km)の単独走破を成し遂げられました。「自分の目で世界を見てみたい」と出発されたのですが、途中、数々の異文化にびっくりし、怪我した足を麻酔なしで切開かれたり、マラリアで熱を出したりしながら、貧しいけれどあたたかい人たちとの交流を楽しみ、笑い、涙する、パワフルな体験を通じて、「自分を見つけた」旅となったそうです。珍しい画像を映しながら、素晴らしい体験をお話いただきました。

## 講師プロフィールおよびサイクリング活動歴

1982年 大阪府池田市生まれ

2001年 大阪外国語大学外国語学部地域文化学科「スワヒリ語専攻」入学

2004年 大学を休学し自転車で日本一周6,000km走破

2004年8月～2005年1月 アフリカ大陸ケニア～南アフリカ8カ国5,000km日本人女性初単独走破

2005年4月大学卒業。その後東京でのOL生活を経て、サイクリストとして独立。台湾一周、キューバ走行

2007年11月エトリア共和国観光親善大使として同国で親善サイクリング

2008年5月中東平和サイクリング(世界30カ国から300人の女性が参加)に「Follow the Women」の日本支部代表として、シリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナを走行。

2008年9月タンザニア自転車サファリツアー参加。2009年1月ベトナム横断

現在、自転車で社会へメッセージを発信する「コグウエイ」代表。日本アフリカユースネットワーク代表

## アフリカ単独自転車旅行のヒストリー

将来は国際貢献事業に携わりたいと考えながら途上国のことを調べているうちにアフリカへの関心がますます高まり、大阪外国語大学外国語学部でスワヒリ語を専攻することになった。大学で勉強をするうち、アフリカへ行きたくなり同級生と2度訪れた。1度目は普通のバック・パッカーの旅行者として。2度目は学生同士の文化学術交流事業として、ケニアに1カ月滞在して現地で活動する日本のNGOや企業を訪問し、現地の学生と一緒にアフリカを知るというスタディツアーであった。その折、スラム街でNGOとして援助活動をしている日本人女性から「まるで赤ん坊みたい。ぬくぬく育てて情けない!」と言いつつ放たれ、自分の世間知らずを痛感した。また、外国人である「日本人」の自分と現地の人々との距離感の大きいことにも気づかされた。

せっかくスワヒリ語を勉強しているのだから、彼らと仲良くなり友達になりたい。「そうだ自転車だ!自転車なら、自分の力でゆっくりとしたスピードで、時間をかけて一生懸命走れば地元の人々の生活に近づけ、同じ目線で親しくなれる」と、大学3年生の春、「アフリカ単独自転車旅行」を思いついた。



## 満点バイクと周到な準備

アフリカへ行くからには、3年生から1年半かけて周到な準備を始めて、4年生で1年間の休学届けを出そうと決意した。運動神経はどちらかといえばドンくさい方なので、まずマウンテンバイクを買って乗りこなそうと思った。それを知った祖父が、「美緒へ マウンテンバイク代」と封筒に書いて誕生日にプレゼントしてく

れた。この間違えた言葉の響きが可愛いく、「私にとっては100点満点！」だ。こうして、初のマウンテンバイクは「満点バイク」と祖父によって命名された。

いよいよ満点バイクと一緒に準備が始まった。自転車のことは何も分からないので、購入店に週1回弟子入りを願い、ねじの回し方、パンク修理、ワイヤーの付け方などの初歩的整備から学び始め、自転車がバラバラになっても自分で修理し、走れるようになるまでの整備技術を身につけた。

大学まで片道12kmの通学に自転車をを使い始め、片道50kmの所なら日帰りをした。体力づくりとして高校時代剣道部で使った竹刀を担いで毎日、近くの五月山に登り、素振りを1000回しながらの精神統一の修行、自称「仙人トレーニング」を行った。アフリカに詳しい人や自転車旅行の経験者を探して話も聞き、また、自分でアフリカ行きを大勢の人に言いまくった。9割方の人から「何考えているねん・・・」等と言われながらも、情報収集を重ねるうちに不安材料にも一つ一つ解決の方法が見えてきて、最高の情報として吸収できたと思う。

大学3年の終わりに『卒業論文調査のためアフリカ渡航』という理由で休学届けを出し、大学から許可を貰った。

### 両親の説得と日本縦断

アフリカ行きを敢行するための最大の問題は両親の説得だった。そのためにまず、実績を作ることが必要だと、2カ月間の日本一周6,000kmの縦断計画を立てた。両親の説得のため以外に、少しでも自国・日本を知り、自分の目で見た日本について外国で話せることが大事だと思ったのである。平成16年4月大阪府池田市を出発 広島 四国 九州 関門 太平洋側 北海道 太平洋側 池田市でゴールする計画を立てた。

ところが、日本一周はとてもお金が掛かることに気がついた。当初、アフリカ行きの資金しか考えていなかったの、困惑していた時、TVで「狂牛病のことで牛丼が売れない」と言う牛丼チェーン店社長の会見を見た。「これだ！」と思い、早速、社長宛に、次の3点を強調した女子大生風の可愛らしい手紙を出した。(1) 企画書：ルート・期間・食費等、(2) 情熱：成し遂げたい熱い思い、(3) 食品データー：サイクリストにとって豚丼のメリット。

3日後、「感銘を受けた。出来る限りの援助をする。」という電話を受けた。これで日本全国「吉野家」食べ放題が可能となった。他に携帯食・カロリーメイトも各中継点に置いてもらった。宿泊は、知人や鉄道の駅、健康ランド等を利用した。このように大勢の皆さんに助けていただいたお陰で、無事、3万円で日本一周を遂行することができた。

大阪に帰ると朝日新聞が、「やったね！次はアフリカ」と記事に書いてくれた。周りの人達からの協力もあり、両親をも説得出来た。母は「足の骨を折ってでも行かせたくない」と言ったが、父は「安全が確保出来るのなら行ってきなさい」と言ってくれた。「自分を信じてくれた皆のためにも絶対に元気で帰ってきます。とても楽しかったと言えるような旅をします。」と約束した。

平成16年8月、リスクは有るかも知れないが、何よりも「最初の思い：アフリカへ行きたい」を大事にしたいと、満点号と共に大阪を旅立ち、ケニア～南アフリカ・喜望峰間の8カ国5,000km走破に挑んだ。

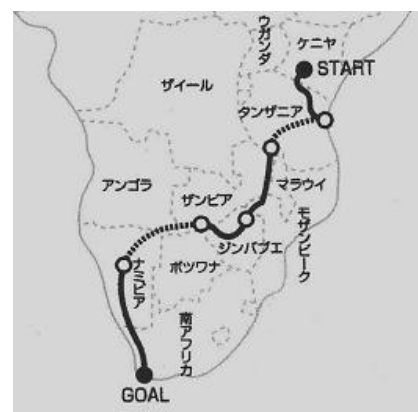
### 自分を見つけた・アフリカ8カ国単独走破

コースは、ケニアのナイロビをスタートして、タンザニア、マラウイ、モザンビーク、ジンバブエ、ザンビア、ナミビア、そしてゴールは南アフリカ・ケープタウンの「喜望峰」である。

日本出発後真っ先に降りる所は、ゴール地点である南アフリカのケープタウン。日本で現地のルートマップを作り、コース上の村や宿泊等を事前に調べていた。が、いきなり自転車で走り出すのは危険なので、まずは下見をして宿や治安状況、道路の状態などの情報収集をし、バスや鉄道などの公共交通機関を使って、自転車を担ぎながら、ケニアのスタート地点まで北上する計画である。

まず初めは、ケープタウンからジンバブエのビクトリアの滝までトラックで行くオーバランドツアーに参加し、ドイツ、オランダ、スイス、アメリカ、日本などの若者20名と共にキャンプをしながら20日間の旅をした。

ツアーの終了地であるジンバブエからは自転車を担いで電車とバスを乗りついで、ケニアのナイロビへ向う予定。身の危険を感じた時はすぐに帰国をしようと考えていた。



そのツアー到着点のジンバブエで、友人になった将来散髪屋になりたいというミュージシャンにヘアカットをしてもらったら、バリカンでアフリカン・レディー風に「丸坊主」にされてしまった。これで、本当に私の旅が始まり、髪が伸びるまでは絶対に帰国できないと思った。



旅の心構えは、「私の武器はフレンドシップ」との心がけと何事にもポジティブな気持ち。武器を持たず、女であることを隠す。そのために日本で、付け髭、胸毛、胸に巻くためのさらし、大きめの長袖、長ズボン、護身用グッズとしてホイッスルやびっくり玩具などを用意した。

自転車には、衣類、自転車修理グッズ、薬や虫除け類、日記帳や筆記具、カメラ等々と、テント、寝袋、水（最低5～10）を括りつけた。食事は現地の人達と同じ物を食べた。昼・夜の主食は、とうもろこしの粉を湯で練って作るウガリ、シマ、サザとパップ、そしてご飯。シチュウなどのおかずと一緒に食べる。現地では、マンゴーはいたるところの木になっていて食べ放題である。買って安く、太陽の味がし、とても甘く美味しい。「マンゴーと丸坊主」と本の題名にする程に沢山食べた。芋虫のフライ（蛾の幼虫）はサラダ感覚で食べられて結構美味しい。皆と笑顔で同じ物を食べ、友情を分かち合った。

**ケニア** スタート地点の首都ナイロビ。高層ビルが立ち並ぶ大都会だが、30km位行くとマサイ族のいるサバンナ（草原）になる。近代化が進む中、マサイ族の若者は携帯を首にかけ、自転車やラジオ（ヒップホップ）を聴きながら町を歩いており、外国人にはそれらを隠し、観光用に写真を撮らせお金をせびる。昔どりの原始的な生活をしている部族もいるようである。

**タンザニア** ある村で、木の自転車に乗っている人がいた。車輪もブレーキも全てが木で、実に良く出来ている。中国やインドからの輸入品は、7千円から1万円程もするとのこと。欲しい物があっても入手できない時は自分の周りにあるものを利用し、あきらめないで作ってしまうのがアフリカ人である。物が溢れている日本人として恥かしくなった。また、ヴィコ村でのこと。雨季のスコールのため「走れない。嫌だなー」と思っていた時、子供たちがドシャ降りの中を喜んでしゃぎまわるのが見えた。気持ちをマイナスからプラス志向へ切り替えることで幸せになれるのだと、可愛い子供達に教えられた。

**マラウイ** マラウイ湖畔で写真を撮ろうとしたら現地の子供達が、カンフーポーズを取り、ジェット・リーか？ブルース・リーか？と聞かれた。中国のDVDやアクションものが多く出回り、アジア人は皆チャイナとかチナと呼ばれ、全員カンフー・マスターだと思われる。

マラウイ湖の水に住む蛭から入るバクテリアによる感染症のために左足がはれあがり痛む。ムズズ村で病院に行くと、足の裏を5cm程、麻酔なしで切開された。コップ一杯の膿がでた。この地で治療、静養のため10日間滞在を余儀なくされた。落ち込んでいた時、宿で親切に身の回りを世話してくれた少年マブト君（15歳位）が、少ない給料からマンゴー、パイナップル、牛乳などを差し入れて励ましてくれた。彼の月給からすると、高価なはずであるのに。彼とは帰国後も、手紙や電話で交流を続けている。また、宿の電話担当の明るく元気なマリエット姉さんは、陽気に私を励ましてくれたが、一昨年、エイズで亡くなったとの連絡を受けた。全人口の15%がエイズに感染しているといわれる身近な病気だが、国民の意識が薄いので大変深刻な問題である。

毎夜、村人から夕食に招かれ、励ましてもらった。親切な人々の心に触れ、アフリカは貧乏で可哀相というイメージだけを抱いていた自分を恥かしく思った。今回の怪我は、私にとって大事なことをいろいろ教えてくれた。

**モザンビーク** ポルトガルの植民地だったのでポルトガルの文化が入り、スパゲティやエッグ・タルト等を食べる。茹で時間が長すぎて伸びきって切れ切れのうどん状態のスパゲッティにオイルをたっぷりかけて食べるので、団子のようなのは残念。モザンビークは300kmを3日間で走った。

**ジンバブエ** 現在のジンバブエは、去年経済破綻でのインフレにより、何百分の物価上昇に加え、コレラが蔓延し、飢餓により国民の殆どが外国に亡命した。出発前に日本で調べていた宿泊、レストラン等は予定の6倍の価格になっていた。しかたなくテントを張ることが多くなり、警察署（ここでもテントを張らせてもらった）ではいろいろと職務質問されたが、警察官は次第にフレンドリーになり、トヨタはいくらか？結

婚しているのか？などと聞かれた。

ミュージシャンの家にホームステイをさせて貰った時、「明日、結婚式だから美緒も行こう」とさそわれ、（招待されていないのに）連れてもらった。200人位の参加者がいて、食べたり踊ったり、2時間以上フィーバーし、その内ご祝儀の時間となり、各自が持参したお金や日用雑貨など、差し出す都度に名前を言って皆で踊る。例えば、「お祝1万円」を渡すと、「山崎さん、1万円」と大声で発表し、そしてまた踊るといように、最高のテンションであった。

**ザンビア** クリスマスと正月にビクトリアの滝に行き、もの凄い水量に圧倒された。傍に立っているだけで、雨がシャワーを浴びた様にびしょびしょになった。1月4日に出発した。

国境を通過する時は、国道の幹線道路に、まるで高速道路の料金所のような入国管理事務所があり、パスポートにスタンプを押して「はい入国」というような簡単な国境もある。しかし、ナミビアとザンビアの国境は検問が厳しく、銃を持った軍人に個室へ連れて行かれ、荷物をくまなくチェックをしてから入国が許可された。

**ナミビア** 砂漠地帯でありナミブ砂漠が知られている。砂の中に道が有り、それらも砂に埋もれ、自転車を漕がないと風の音だけの無音地帯で、自分自身が砂になってしまうのではという思いに駆られた。日陰も無く、木が生えていても上には致死率100%の猛毒を持った「ブラックマンバ」という蛇がいて、バサッと落ちてくる。しかたなく、54度もある炎天下で休息を取った。前カゴに入れたパンは焼け、水はお湯になり、紅茶にして飲んだ。30分に1回500mlの水分補給をしないと、汗が塩になる。全く、孤独との闘いであった。

**南アフリカ** ケープタウンは商業も発展し、近代的でカラフルな町並みの観光地でもある。美味しい食事や冷たい飲み物も、ショッピングモールもある。そんな街に1月20日、戻ってきた。今迄、何も無い所をずっと走り続けて来たので、ここに辿りついた時はまるで夢のようでワクワクした。

翌21日、いよいよ**目的地の最終ゴール『喜望峰』**にアタック。世界遺産に指定され、独自の固有植物や珍しい鳥や動物もいる。全てがとても美しく輝いて見え、物語の主人公のように感じて大変感動した。でも、考えてみれば、私達の生活はいつも輝いていても自分では気が付かないだけではないか。アフリカは貧乏で可哀相だというイメージを勝手に思い込んでいたことが本当に恥ずかしい。

**2005年1月30日、日本に帰国** 両親をはじめ家族、友人、メディア等が空港で「お帰りなさい」と迎えてくださった。旅の間、ずっと身の危険にさらされていたので、「ただいま」と言えることの大切さを知り、喜びを噛みしめた。

この度のアフリカの旅は、実は1人旅ではなく沢山の山の人達に支えられ、助けられたからこそ成し遂げられた。どこの村でも現地の人々に助けをもらい、日本にいる大勢の方から応援してもらったからこそ、ここまで来られたのだと、改めて感じ、皆さんに感謝した。109日間で5,000kmを走破して、初めて自分を見つけることができたのである。

いろいろと私に教えてくれたアフリカ。これからも自分なりのやり方を見つけながら、アフリカと関わっていききたいと思う。いつも、「感謝」「強い思い」「楽しんで生きる」をモットーに、友情を最高の武器にして、自転車での世界各地の見聞体験を伝え繋ぐ活動を続けていきたいと考えている。

(以上)



出席者の多くの皆さんは、「アフリカ自転車一人旅」をするには、がっしりした女性だと想像されていたようですが、にこやかで、すらりとした美人が現れたので、まず意表をつかれたようでした。自転車で社会へメッセージを発信しようという発想はまさに、世界を視野に入れた今を生きる若い人ならではのものなのでしょう。将来の夢は「池田市長」とおっしゃる、チャーミングで頼もしく、素敵な女性でした。質疑応答の時間には、若い方からも中高年の方からも「お話を伺って元気をもらいました」という多くの声が聞こえました。美緒さんの「夢、叶いますように！」応援しています。

(国際理解講座委員会 担当常任理事 渡部俊子)

## 追悼文

我々の年来の仲間であった大場浩平さんが、去る3月3日、永眠されました。

大場さんは1981年、港ユネスコ協会の創立にかかわられたお一人です。慶應義塾大学のユネスコ倶楽部以来の経験と情熱で1992年には副会長、そして1994年からは監事などの役職にも就かれ、活躍してくださいました。

4月25日の当協会2009年度総会にあたり、お集まりくださった会員の皆様方に、謹んで、この訃報をお知らせしました。大場さんのいらっしゃる所には、何時も太陽のような温かみと、やさしさがありました。大場さんは、「無宗教」とご自分では言っておられたそうですが、生前、強い意志を持って我々とともに、ユネスコ活動を通じて平和な世界の構築のために献身的に働かれた事を思い起こしつつ、会場の皆様とともに、大場さんのために黙祷をお捧げしました。(会長 三輪公忠)

## 事務局便り

【新入会員】 《個人会員》清水明美さん、岩崎美穂さん、松崎加寿子さん

【これからの事業予定】 (詳細は別途チラシなどでご案内しています)

- 6月12日(金) 18:30~ 新入会員を囲む会(会場 生涯学習センター)
- 7月4日(土) 12:00~ 南インドの家庭料理(会場 男女平等参画センター料理室)
- 7月7日(火) 18:00~ 第12回MUAサロン「お香とミニ茶会」(会場 協会事務局)
- 7月30日(木) 18:30~ 国際理解講演会「トルコ」(会場 生涯学習センター)

再度のお願いです。ご自宅でお使いになっていない下記製品とマニュアルがありましたら、協会の業務・活動のためにご寄付いただけませんか?事務局までご連絡お願いいたします。

電話機(受話器)で応答メッセージの機能があるもの      デジタルカメラとその付属品

### 港ユネスコ協会事務局 (火~金 10:30~18:00)

〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3      TEL 03(3434)2300      TEL・FAX 03(3434)2233  
Email: minato-unesco@nifty.com      ホームページ <http://www.unesco.or.jp/minato/index.html/>

### 編 | 集 | 後 | 記

ホームページ改訂など、港ユネスコの活性化を大変嬉しく思っています。(遠藤) / 爽やかな風の吹く素敵な季節になりました。最近オープンカフェによく行くのですが、外で食べる食事って気持ちがいいものですね。いつもよりおいしく感じます。(島田) / 5月の連休中、遅ればせながら映画「おくりびと」を観てきました。海外ではマンガやアニメが「ジャパン・クール」ともはやされていますが、今後、こうしたいい映画をもっとつくって、世界に日本文化のよさを発信してもらいたいな、と強く感じた次第です。(棚橋) / 浜松町にあるエコプラザでは楽しく環境問題が学べます。エコでおしゃれな空間にも感動です。ホームページでイベントをチェックしてお出かけください!!(中前) / 毎年5月の連休明け頃から花粉症に悩まされて、5月一杯はマスクを着用しています。多分、カモガヤでしょう。最近、近所の子供たちが、「おじさん、年寄りには新型インフルエンザにかからないってテレビで言ってたよ」だって。(水野) / 東京駅で、全員マスクをした修学旅行の生徒さんが並んで移動しているのを目にして、花粉症のためマスクに親しんでいる私でも、異様な気がしました。あまりの過剰反応!と笑い飛ばせないのがかなしい。日常生活の中での白いマスクに抵抗がないのは、なんと、日本だけだそうです。(高井)